

# 教員養成における体系的な教育課程の開発と実践 ～理論と実践の融合を図る往還的な学修～

下野 洋, 森 洋子, 小森芳順, 田中陽治, 菊池真也, 大平高司  
位田かづ代, 松本香奈, 水野伸子, 齋藤陽子

岐阜女子大学文化創造学部

(2014年9月1日受理)

## Systematic development of a curriculum and practice in teacher education

Faculty of Cultural Development,

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

SHIMONO Hiroshi, MORI Yoko, KOMORI Hojun, TANAKA Yoji,  
KIKUCHI Shinya, OHIRA Takashi, INDEN Kazuyo,  
MATSUMOTO Kana, MIZUNO Nobuko and SAITO Yoko

(Received September 1, 2014)

### 要 旨

1年次から専門的知識を学ぶ「理論的学び」と体験を通して教育実践力を身に付ける「実践的学び」を融合し、スパイラルに学修を行うことができる教育課程を構築し教員養成を行っている。これを「EGG (Enjoy Global Growing up) プラン」と称している。今回はその中でも1～4年次における体系化した体験活動についてその活動実態を報告する。

#### 1. はじめに

今日の高度情報化社会及び知識基盤社会の中にあつて、学校教育の場では従来から受け継がれてきた知識量を増大させることを中心とした考え方や手法だけでは適切な対応とは言えないであろう。

今後は、個人自らの知識や技能を駆使して問題を解決し、複雑さを増す世界の中で相互依存的に適応できるよう生涯を通して学習する機会を設ける必要がある。

これまでの教育の在り方を改善するにあつては、例えば、学習の4本柱(天城, 1997)の考え方やPISAの上位概念となっているキーコンピテンシー(立田, 2006)の考え方などを参考にしていくことも大切だと考えられる。

すなわち、学習の4本柱における「知ること」を学ぶ」では、科学的な見方の学習、成長するにしたがつて科学を発展させ現代世界のパラダイム(理論的枠組み, 方法論)決定要因としての方法論や概念、主導的な思想につ

いて訓練することを指している。

「なすことを学ぶ」では、個人の将来の職業選択と関連が深くコミュニケーション、協調性、管理能力、問題解決力、直観力、勤の良さ、判断力、組織力などが求められる。

「共に生きることを学ぶ」では、例えば異集団の接触が、平等な見地で行われ共通の目標や目的をもって行われれば、潜在的な敵対心を減少させ、より穏やかな協力関係と友情を芽生えさせることができる。

「人間として生きることを学ぶ」では、上記3つから導き出される内容の総合化を図るために教育は個人の全面的な発達、すなわち精神、肉体、知性、感性、美的感覚、責任感、倫理観すべての発達に寄与すべきである。

また、キーコンピテンシーには、そのカテゴリーとして、「相互作用的に道具を用いる」「異質な集団で交流する」「自律的に活動する」の3つを挙げており、PISA 調査の「読解力」「科学的リテラシー」「数学的リテラシー」は、それらカテゴリーの「相互作用的に道具を用いる」に位置付けられている(長崎, 2014)。すなわち、人間と社会にとって必要な能力の条件として、ここでは「社会や個人にとって価値ある結果をもたらすこと」

「いろいろな状況の重要な課題への適応を助けること」「特定の専門家だけでなくすべての個人にとって重要であること」を設定している。

キーコンピテンシーのカテゴリーと学習の4本柱には、いくつかの共通する資質や能力を見出すことができる。例えば、共通目標のための共同作業(共同学習)を行うこと、自主的で批判的な思考発達を遂げ、独自の判断力を構築すること、想像力と創造性を豊かにすることなどである。

この変革期における初等教育のカリキュラムを考えるにあたってどのような子ども像、

どのような教師像を描くか、これまでの実践を通してその一つの姿を提示することとした。

## 2. 初等教育学専攻における教育課程

本初等教育学専攻では、大学の講義において教育に対する専門的知識を学び、小学校等での体験学習を通して教育実践力を身に付けることを実施している。1年次から専門的知識を学ぶ「理論的学び」と体験を通して教育実践力を身に付ける「実践的学び」を融合し、スパイラルに学修を行うことができる教育課程としている。これを「EGG (Enjoy Global Growing up) プラン」と称している。

文科省の示す教職課程としての科目、厚労省の示す保育士課程の科目について、理論学習と実践学習を年次系列化し、さらに実践面を強化する多様な体験実習を組み込んだ専攻独自の養成プランである。

「EGG プラン」の構想内容や研究進捗については、本誌前号第43号で研究報告をした。ここでは、「EGG プラン」における「実践力をつけていく体験活動」を中心に、その体系化と深大化の実践取り組みについて述べる。

3年次に配列する「教育実習」をより確実な成果に繋ぐために、事前の学校体験を重視し、複数回の現場体験を設定している。1年次であっても、理論学習を、「保育・学校現場」の具体像で捉えながら理解を深めていくことをめざし、机上の学習との両輪としての「現場体験」を以下のように構想している。

- ・1年次：幼稚園現場の体験、保育所現場の体験、小学校現場の体験
- ・2年次：小学校現場の長期体験
- ・3年次：遠地小学校現場宿泊体験
- ・子ども発達専修生：「ミュージカル上演体験」

・学校教育専修生：「稲作活動体験」

### 3. 1年次における学び

#### (1) 保育園・幼稚園・小学校体験学習の目標

##### ①幼稚園体験学習の目標

- ・幼稚園における教育の様子に触れる。
- ・一緒に活動する中で、子どもを知る、感じる。
- ・自分と子どもとのかかわり方について考える。

(6月に近くの幼稚園の協力を得て実施)

##### ②保育所体験学習の目標

- ・幼稚園と保育所との違いを理解する。
- ・保育活動の様子を観察や子どもたちとの触れ合いの体験を通して、幼児期の子どもの指導にかかわる学修をより充実した実践的なものとする。

(9月に山県・岐阜両市内の3か所の保育所の協力を得て実施)

##### ③小学校体験学習の目標

- ・小学校における教育活動の見学・体験を通して、児童理解や教員の仕事についての見識を深め、教育に対する情熱をいっそう膨らませるとともに、教員になる夢を実現するために必要な自らの課題等を明らかにする。

(2月に山県市内の9小学校の協力を得て実施)

#### (2) 保育所・幼稚園・小学校体験学習の内容

##### ①幼稚園体験学習(6月)

###### ア 事前研修

- ・子どもたちとかかわることの尊さと責任について確かめた上でオリエンテーション、自分が学びたいこと具体化

###### イ 研修当日

- ・午前9時過ぎに幼稚園に到着し、11時頃ま

で幼稚園における教育を体験

- ・各方面からくる幼稚園バスの到着を確かめながら、登園してきて園庭で遊ぶ子どもたちとの触れ合い

- ・幼稚園教員からのオリエンテーション

- ・配当された3～5歳児の各クラスに入り、子どもたちとかかわりながら約1時間にわたって教育活動を体験。

- ・お絵かき、ブロック遊び、歌、運動など

###### ウ 事後研修

- ・自己課題に対する評価。次の保育所体験に向けての課題の明確化、自分が体験しなかったクラスの様子交流

##### ②保育所体験学習(9月)

###### ア 事前研修

- ・保育所と幼稚園の違い、それぞれの役割の理解

- ・幼稚園体験を踏まえた自己課題の明確化

###### イ 体験当日

午前9時から午後4時まで、保育所における保育の様子を丸一日体験する。

- ・朝、保護者が幼児を送ってくる様子の確認
- ・庭で遊ぶ子どもたちの中に入っている触れ合い

- ・1歳児～5歳児の各保育室に分かれ、給食(弁当)、そうじ、排泄の世話、昼寝など基本的な生活を中心とした様々な保育の体験。

- ・保育室の備品整備や行事に向けての器具準備、資料作成など保育士の仕事を体験

- ・保護者のお迎えの様子を参観

###### ウ 事後研修

- ・幼稚園との違いを踏まえながら自己課題についての評価、新たな自己課題の整理

##### ③小学校体験学習(2月)

###### ア 事前研修

- ・義務教育における教師の役割・仕事内容及び児童期の子どもの特性の理解

- ・ 幼保における体験を踏まえた自己研修課題の確認、明確化
- イ 研修当日 (3日間)
- ・ 校長、教頭等からの講話、オリエンテーション
  - ・ 配当クラスにおける教育活動を3日間にわたり体験
  - ・ 登下校指導、授業の観察、給食や清掃指導、子どもたちとの触れ合いなど
  - ・ 放課後の児童会など学級、学年を超えた活動への参加
  - ・ 担任を始めとした先生方との懇談
  - ・ 掲示物の作成や行事に向けての諸準備 (テント張りなど) の体験
- ウ 事後指導
- ・ 自己課題についての評価、保育士・教員を目指していくための自己課題の明確化

### (3) 幼稚園・保育所体験学習の様子

#### ①幼稚園体験学習の様子



図1 園児とふれあう学生

一斉活動前の自由遊びでは、学生は最初のように子どもたちに働きかけるか戸惑いながら接していた。しかし、そのうちに慣れてきて積極的に子どもとのかかわる姿が増えてきた。

しかし、約15分という短い時間だったため、意欲はあってもうまくかかわりを作れずに終わってしまった学生もかなり多くいた。

教室では、園児がグループ分けされ、ローテーションに従って活動していた。学生はそのグループに入って、英語を使った簡単なコミュニケーション活動、音楽に合わせて声を出し体を動かす活動、トマトの生長を記録する自然体験活動など様々な活動に参加し、先生の補助をしていた。

学生が今まで持っていたイメージの多くは、幼稚園は一斉に子どもを遊ばせたり学ばせたりするところというものだったが、体験学習を行った幼稚園は、「子どもが自ら学ぶ」という方針をもち、少人数のグループ活動を多く取り入れていたため、多少の戸惑いと新鮮な驚きを感じつつ活動に参加していた。この園の特徴である英語コミュニケーション活動の豊富さには、驚きを感じるとともに、子どもの吸収の早さに感心していた。

また、教室の活動は約1時間という短い時間だったが、先生の指導ぶりを観察し、子どもへの細やかな目配り、一人一人への柔軟な対応力などを学び取っていた。

#### ②保育所体験学習の様子

保育所体験学習は時間の余裕があったため、子どもとのかかわり、子どもや保育士の観察などにじっくり取り組むことができた。

例えば、子どもとのかかわりについては、うまくかかわりを作れなかったという幼稚園体験学習の反省を踏まえ、自分から積極的に子どもと接する姿が多く見られた。

また、保育士の子どもとの接し方についても、多面にわたって細やかに観察し、自分の言葉かけなどに生かそうとしていた。中には、一緒に作業をするかたわら、短時間だが先生から保育についての貴重な話を聞くことができ、大変有益に感じた学生もいた。

#### (4) 保育園・幼稚園体験学習の成果と課題

##### ① 幼稚園体験学習の成果と課題

幼稚園体験学習の目的である「幼稚園教育の実際を学ぶ」「子どもと一緒に活動する中で、子どもを知る」「自分と子どものかかわり方について考える」の3点について学生の感想をあげ、成果と課題について述べたい。

##### ア 幼稚園教育の実際について

このことについて次のような感想があった。

「声の大きさ、トーン、動作にメリハリ、大小があり、子どもの心を引きつけていた。」

「(先生は)常に子ども達の動きを見ていた。ある程度決められた活動は、誰もが平等に取り組めるようにという意識が伝わってきた。」

「(先生は)一人の子だけを見るのではなく、活動の中で全体を見て、気になった時はその子に声をかける行動をとっていました。良いことはしっかりとほめて、悪いところは子ども達が気づけるような声かけをしていました。」※( )内は筆者が補足。以下同様。



図2 先生の指導の仕方を学ぶ学生

以上のように、幼稚園教諭の話し方、動作、子どもに対する目配り、声かけの仕方など、様々なことを学生が学んでいた。

##### イ 子どもを知ることにについて

このことについて次のような感想があった。

「園児はただの遊具でも、それがおにごっこならタイム(をとる)場所、ほかの遊びなら夢の世界というように想像力がすごく豊かで驚きました。」

「実際に自分の目や耳で感じ触れあうことで、子どもは思ったよりも自分でできるし、好奇心も旺盛で、自分の想像とは違ってびっくりした。」

以上のように、学生は、自分の予想と違う子どもの姿に気づいていた。しかし、「(子どもの姿を)表面的には知ることができたと思う。しかし、内面にもぐっと踏み込んだ学びをしたかった。」という感想もあり、十分子どもの姿を理解するには、時間が短かったことが分かる。

##### ウ 自分と子どものかかわり方について

このことについて次のような感想があった。

「たくさん子ども達とふれあおうとしたけど、いざとなるとどう声をかけていいのか分からなくて、特定の子にしか声をかけることができなかった。」

「最初の自由遊びは、子ども達の中に入っていいのかとまどいがあつてなかなか中に入れなかった。もっと自分の殻を破って前に進む気持ちが必要だということを感じた。」

このような感想が多くの学生にあった。今回初めての体験学習で、しかも2時間だけだったため、子どもとかかわりを深めるには時間不足だったことが分かる。

##### エ まとめ

幼稚園体験学習では、短い時間の中で、学生が子どもと意欲的にかかわろうとし、先生や子どもの姿の一端を知ることができたことが成果である。

課題は、子どもとのかかわりを深めたり、子どもの姿を深く知ったりするには時間不足であった点である。子どもと十分かわれなかったという学生の思いは、次の保育所体験活動の充実につながっていった。

## ② 保育所体験学習の成果と課題

保育所体験学習の具体的目標は「子どもとかわり、子どもを知ること」「先生の保育の仕方を知ること」「幼稚園と異なる保育所の特徴を知ること」の3点である。それぞれ学生の感想をあげ、成果と課題について考えたい。

### ア 子どもに関することについて

子どもに関することの感想は、子どもの姿に関することと、自分と子どもとのかかわりに関することに分けられる。まず、子どもの姿については以下のような感想があった。

「今回2歳の子とかわり過ごしたことによって、自分がどれだけ、2歳児を赤ちゃんと同じレベルで大人のサポートがなければ何もできない弱い存在であると勘違いしていたかを思い知らされました。」

「先生が叱る前に子どもたち同士で注意し合っていて、年長になると、ほとんどのことが自分でできるようになり、友達や年下の子まで気にすることができていて驚いた。子どもたちに自分で考えて行動させることの重要性を学んだ一日でした。」

以上のように、学生の予想よりその年齢の子どもにできることが多いことに気づき、驚いたという感想がかなり多くあった。一方、同じ年齢でも成長度合いに個人差があることに気づいたとする感想もあった。

次に、子どもとのかかわりについては、以下のような感想があった。

「前は自分から何もすることができず、ただ見ていただけになっていましたが、今回は自分から子どもたちのところに行けたと思

います。」

このようにかかわり方が改善したという感想が多くあった。しかし、もう少し深く接するとすると、

「子ども達と仲良くなるのはいいのですが、厳しいことが余り言えず、子ども達のペースに振り回されることが何回かありました。もっと、びしっと言えるようになりたいです。」

というような感想があり、学生は、叱ったり注意したりする指導の難しさを感じていた。

### イ 先生の保育の仕方について

先生に関する感想は、大変多かった。

「(外見ではわからなかったが)子どもの手をひいて移動しているとき、先生は子どもの体温の高さに気づいた。急いで計ってみると39.2度あって、(中略)本当にちょっとした変化も見逃さないことの大切さを身にしみて感じた。」

「一つのクラスの子ども(15人程度)に対して2人の先生がトイレに付き添っていました。そして、その二人の先生の両方もが『〇〇君、ずっと便座に座ってますね』『今日はもううんち出たのですが、長いですね』など、お互いに別の子の補助をしていたのに、他の子のこと(言動・行動)を把握していました。」

このように学生は、先生の観察力の鋭さ、目配りの広さに気づいていた。

また、以下のような感想もあった。

「(年長クラスで)お片付けや給食のときなど、保育士と一緒に子どもとやってあげるのではなく、ちゃんとやっている子どもを大きな声でほめていた。逆に何回注意しても聞かない子どもには厳しくし、隣のクラスに行かせたりとはっきりさせていた。」

多くの学生が、子どもの成長段階・場面に

応じた声のかけ方, ほめ方, しかり方を, 先生の具体的な指導の仕方から学び取っていた。

さらに, 以下のような感想もあった。

「身振り, 手振りに始まり, 声のトーンや顔の表情など, とにかくからだ全体で話しているなあという印象を受けました。」

学生は, 子どもを惹きつける先生のパフォーマンスの多彩さに驚き, 吸収しようとしていた。

ウ 幼稚園と異なる保育所の特徴について

幼稚園と保育所の違いに関してふれた感想は少なかったが, 以下のような感想があった。

「保育園は, 幼稚園と違い自由遊びが中心であり, 子ども達は先生の指示があるまで自由に遊んでいました。」

「保育の時間や対象年齢などが目に見えて幼稚園とは違うということがわかった。保育所は共働きの方が多く, 朝も個人で登園するので, 私たちが保育所に入る前から忙しい感じが伝わってきた」

今回目標とした保育園と幼稚園との違いの理解に関しては, 感想が少なかった。しかし, 1日滞在することで実感として気づいたことはあったと考えている。

エ まとめ

保育所体験学習では, 幼稚園体験学習で不十分だったと感じていた「子どもとのかかわり」について, ほとんどの学生が改善を図ることができた。これが保育園体験学習の第一の成果である。また, 子どもに対する観察の鋭さ, 目配りの広さ, 効果的なほめ方やしかり方, 子どもを惹きつけるパフォーマンスなど現場の保育士の観察力・指導力について, 多くのことを学ぶことができた。これが二つ目の成果である。

さらに, 適切な注意の仕方や子どもに対するパフォーマンスなど, まだまだ自分にはで

きないことが多いと学生が実感したことが重要である。これらを自己課題として意識し続け, 今後の幼稚園・保育所での実習に臨めば, その内容がより充実したものになるだろう。

課題は, 1日保育所を体験したといっても特定の年齢のクラスだけであったことである。他の様々な年齢の子どもの姿, 年齢に応じた保育の工夫などまだまだ学ぶことは多い。これは, 期間の長い幼稚園・保育所における実習で補えばよいだろう。

以上2回の体験学習によって, 学生は大学での幼児教育・保育の理論的学習に対して, 多くの体験的裏打けを得ることができた。また, 今後自らの将来の方向を考える際にも, 参考になることが多くあったに違いない。

## 4. 2年次における学び

### (1) 学校体験学習の目標

初等教育学専攻の学生が学校の見学・体験をすることにより, 児童理解や教職についての見識を広め, 教育に対する情熱を抱ききかけとなる機会とする。また「学校理解」を深め, 教師を目指す自己課題を見出す契機とすることを目標としている。

### (2) 学校体験学習の内容

本学校体験学習は1年次の発展であり, 次のことを主な内容としている。

- ・学校における様々な教育活動の参観及び作業活動
- ・様々な活動における児童とのふれあい活動  
実施期間は, 次のとおりである。
- ・平成26年9月8日(月)～12日(金)  
(5日間)

上記期間学生は, 連続して同じ小学校に赴き, 活動を行う。所属クラスがあり, そのクラスに入り, 教員の生活指導の様子や授業の

様子を参観させていただいたり、手伝いをさせていただいたりする。所属クラスは学校によっては5日間の中で、2年生3日間、5年生2日間と変わる場合もある。

### (3) 学校体験学習の様子

体験学習中の学生は、教室内で教師の授業方法や児童への声かけなどを参観し、気が付いたことはメモを取り、参観している中で疑問に感じたことは、時間があるときに担当の教員に聞くことをしている。時には、担当教員より依頼を受け、子どもの日記へのコメントを書く活動をしたり、教室掲示の作成をしたりしている学生もいる。図3は、子ども達に絵本の読み聞かせを行っている様子である。



図3 読み聞かせする学生

中には、児童の中で教員になる夢を持っている子と対話する機会を設けてもらい、児童からの質問に応えることを通して、児童にも教員になる夢を強くしてもらうことができる活動を行った学生もいる。

### (4) 学校体験学習の成果と課題

学生は各々体験学習に臨むに当たり、1年次の体験学習で感じた課題から今回の体験学習における目標を設定している。体験学習期間中はその課題を意識し臨んだ。以下に学生

の目標と振り返りを挙げる。

①目標：教師のどんな言葉がけが子どものやる気につながるのか。

振り返り：褒めることが大切。ただ褒めるのではなく、「〇〇君のこういうところがいいね。」と具体的に褒めることが大切であることが分かった。

②目標：教師と子ども達の表情・言葉・行動に注目して心の動きを見て、それぞれ理解する。

振り返り：子ども達の情報をお互いに知り合う努力がなされていて、教師と子どもの心の動きの基礎にはそういった連携がある。そのことがよりよい表情や言葉・行動が生まれてくるのではないかと思った。

③目標：学級経営をしていく中で、担任の先生から見られる重要なポイントを児童との接し方から学ぶ

振り返り：アイコンタクト・メリハリ・自己開示の3つを今回勉強をさせてもらった。これは先生が大事にしている学級経営のポイントだと感じた。

これらのように自分の経験から具体的な目標を持つことで、5日間の体験学習での学びの軸ができ、自身が教える立場に立った時に繋がっていく「気づき」の自覚化であると言える。

## 5. 3年次における学び

### (1) 遠地体験学習の目標

これまで「教職リサーチ」を中心として学んできた体験的学修の総括的な学校体験学習として位置づけ、小学校教育実習につながる実践的な場とする。特に岐阜地区とは異なる飛騨地域の文化やその文化に培われて運営されている学校の教育活動に直接触れることを

通して、地域に根ざした学校教育のあり方を知る機会とするとともに、小学校での授業参観および児童への学習支援等の活動参加をすることにより教育実践力を高めることをめざすものである。

## (2) 遠地体験学習の内容

### ①実施日

平成26年9月1日(月)～3日(水)

### ②体験小学校

- ア. 高山市立宮小学校 学生13名
- イ. 白川村立白川小学校 学生13名

## (3) 遠地体験学習の様子

### ○第一日目(9月1日<月>)

#### ①地域の見学

- ア. 高山市内(古い町並み)の見学
- イ. 白川村合掌集落の見学

#### ②講話

- ア. 地域の説明および教育理念を学ぶ
  - ・高山市教育委員会および白川村教育委員会より説明
- イ. 体験小学校の説明と体験学習の注意事項
  - ・体験小学校長より説明

### ○第二日目(9月2日<火>)

#### ①各小学校にて体験学習①



図4 実践活動をする学生

- ・所属する学級における活動参加
- ・学生指導による実践活動①(20分間)

### ○第三日目(9月3日<水>)

#### ①各小学校にて体験学習②

- ・所属する学級における活動参加
- ・学生指導による実践活動②(20分間)

## (4) 学校体験学習の成果と課題

体験学習を終えた学生の感想である。

①一番強く感じたことは、子ども・先生・地域の方が同じ目標・同じ姿勢で、学び生活していることです。白川村にしかない環境の良さ(結の伝統など)を利用したり、生まれた地を愛し白川の人間として一人だちできるようにしようとお互いに高め合っている姿は、挨拶・授業・さまざまな場面で見ることができました。今回の体験学習では本当にたくさんの方の学び、教育の方法の一つのモデルを見たように思いました。

②今回20分間の授業を2回行わせていただきました。担任の先生からは「黒板に貼るのか貼らないのか」「言葉で答えさせるのか、書かせるのか」などのアドバイスをいただきました。授業中の言動一つ一つの細かいところまで考えたり、授業の進行の方法がどんな意味を持っているのかを考えて授業に臨まないといけないことを学びました。

体験小学校は、2校とも次のような特色を持っている。

- ①一学年一学級の小規模学校であること
- ②地域と学校との結びつきが強いこと
- ③小中一貫教育を進めていること

学生の感想には、その特色に関する学びが多く見られた。また、初めて「授業実践活動」

表1 体験学習アンケートの結果

(N: 26名)

項目	質問内容	体験学習前	体験学習後
(1) 学校と地域を 考える	①地域の風土・歴史に育まれた地域の特色や文化を知る。	1.38	3.88
	②地域の特色や文化に根ざした教育の様子を知る。	1.15	3.12
	③自分の地元の小学校や山県市の小学校との共通点や相違点を探る。	1.05	3.35
(2) 教育 実践	①児童との触れ合いを通して、児童理解を深める。	1.75	3.50
	②教材研究を深め、実践活動の構想をより確かなものにする。	1.47	3.33
	③教師としての態度や指導技術を学ぶ。	1.56	2.77
(3) 取り組 みの姿 勢	①「明るさ」・「誠実さ」を心がける。	2.90	3.70
	②自主的な行動を心がける。	2.88	3.21
	③けじめのある態度・姿勢を心がける。	2.81	3.74
	④責任ある行動を心がける。	2.81	3.61
	⑤みんなで協力しあう。	2.52	3.82
	⑥メンバーの新たな一面を見つける。	2.10	3.56
(4) 目標の 達成	①自分の目標が達成できたか	—	3.61
	②学校体験学習を自分にとって意味のあるものにすることができたか。	—	3.86
全項目の平均		2.03	3.50

〈評価の段階〉

1: 知らないこと(できないこと)が多い	2: 資料を見て(見たり聞いて)分かる
3: 資料やメモを見て説明ができる	4: 自分の言葉で説明できる(実践できる)

を体験したことにより、児童の前に立って授業をすることの厳しさも学んだようである。

次に体験学習の前後にアンケート調査を実施し、学生がどのような学びをしたのかを探った。その結果が、〈表1〉である。それぞれの質問に対し4段階で自己評価し、平均得点を算出した。その結果、次のようなことが明らかになった。

- ①全ての項目について、体験学習後の方が高得点である。
- ②「学校と地域を考える」項目に大きな変化が見られた。(前: 1.19→後: 3.45)
- ③最も高い得点を示したのが、「目標の達成」である。(項目平均: 3.74)
- ④「取り組みの姿勢」については、それまでの体験学習によりある程度は身につけて来

ていることが想像される。しかし、この体験学習を通して、その意識がいっそう高まってきたことがうかがえる。

#### (5) 幼稚園・小学校教育実習への接続

遠地学校体験学習は、学生にとって幅広く多くの学びがなされた。また、「取り組みの姿勢」に見られるように、1・2年次での体験学習の経験が十分に生きていられると考えられる。集大成としての遠地学校体験学習で得られた成果が、この直後に実施される「小学校教育実習」につながっていくものと思われる。

## 6. 学年を跨ぐ継続の学び

### (1) 総合体験実習としての「稲作活動」

実践力と体験について、以下のように考えている。

教育の仕事は、個に応じ時を逸さずと一瞬一瞬に多様な対応が求められる。文科省の「教員と体験活動に関する基礎資料」中でも「教員養成の在り方」の項に次を示している。

…①学力向上への対応、②暴力行為、いじめ等の生徒指導上の課題への対応、③特別支援を必要とする児童生徒への対応、④家庭や地域力の低下等、教員が対応すべき課題の急増、…

今後10年間に全体教員の3分の1が退職し、経験の浅い教員が大量に誕生することが予想されること。新人教員について、実践的指導力やコミュニケーション力等が十分に身に付いていないとの指摘があること…等を背景に、教員養成においてこれまで以上に高度な実践的指導力やコミュニケーション力等の育成が求められている。

専攻の学生の実態を観ていても「実践力、コミュニケーション力の乏しさ」は言を俟たない。教育養成課程のこの急務にして継続的課題に対して、カリキュラムを構造的にプログラム化して推進しているところであるが、学生の姿の何を以て「実践力・コミュニケーション力」の有無、また高揚を問うのが、複雑であり明確化できないままの課題をかかえている。

上記①から④の実態への即戦的な実践力やコミュニケーション力は、専攻のコアカリキュラムによる「理論学習と現場実践との往還」の学びにより、机上学習と現場学習が機能化されることによって、資質能力として高まっ

ていくことであると考えている。実践力もコミュニケーション力も、具体的なスキルの範疇ではなく、思考と実地行動との融合から生み出されていく力であるとして、求めている。

これらの考えに立ち、学校現場体験の域を超えた「見通しの上に立つ計画」「認知を伴う労働活動」「効率的な仕事配分」「年齢差経験差のある多様な人材との有効な関わり」「共同作業の意義と充足」等を、学び体験する長期にわたる活動を組み込むことを必要とした。本学の環境は校舎南面には、広々と田園が続いていることから、その一角を借り受け、上記事項を満たす「稲作活動」を「総合体験実習」として位置づけた。学校教育専修学生は、全員参加の体制で取り組みをしている。

#### ①活動の目的・趣旨

本活動は、本学の地域の方々への支援を多大に受け、大学近くの休耕田を借りその田を活用して米を育てている。この取り組み展開に対して、地域の農業専門家、「ぎふJA」の農家指導担当職、本学の庶務職員などから指導・助言を受けている。活動のスタートは、2月の田おこし、学年が進級しての4月の代掻き、育苗、田植え、水の管理と生育の観察、稲刈り、天日乾燥、脱穀、収穫の一連の作業を体験している。細かくは、種籾の消毒の仕方、肥料の施し方など「八十八の手間を要すること」を実体験するのである。また、地域の小学校の活動と協業で、学生が指導の立場で稲の害を防ぐかかしを制作する。水田にかかしを立て、かかしに交通安全のたすきをかける「警察の地域活動」とも協業していく。作業したこと学んだことの活動の記録を残し多くの学生にその内容を広める「広報班」も組織し、『稲作研究会』と称して継続的・計画的に実践している。

活動の目的・趣旨は、研究会活動において「米」を育てることを通して

- ・自ら体験し、一連の流れを実感的に理解することで、教員になる上での知識（理科、社会科も含む）・企画運営の実践力・作業力や経験知を養うことができる。
- ・活動の過程の中で、多くの人と関わる力やコミュニケーション能力を高め、仲間と共にやり遂げた達成感を味わい、活動を通して得た苦労や思いを児童育成の教育へとつなげていくことができる。

上記の教師としての教育実践力を学生としての稲作研究会活動、どの場でどのように身に付け、活動の意義を浸透させていくかを課題として実践している。

## ②本活動に期待していること

文部科学省が教員養成として、今後求められる教員の資質能力には様々なものをあげているが、本活動を通して身に付ける能力として次の3点が考えられる。

### ア. 人と関わる力（人間力）

平成17年の中央教育審議会答申で示された教員に求められる資質能力の中で最も重要な要素としてあげられているのは「総合的な人間力」である。具体的には、「豊かな人間性や社会性」、「対人間関係能力」、「コミュニケーション能力」、「他の職員との協調性、同僚性」等である。人間関係の希薄な時代において学生がこのような力を身に付けることは難しいと思われるが、その意味において本活動は重要な役割を果たすと考える。指導専門家、経験豊富な庶務教職員やJA職員の方々との関わり、かかし作りや収穫祭に参加する学校の児童や保護者・担任教師・警察の方との関わりと多種多様である。活動に取り組む学生同士の関わりからの同僚生の養いなど様々な場で人と関わる機会があり、その中で自分がどう関わったらよいのかを常に考え行動し、対人間関係能力やコミュニケーション能力などを身に付けるのである。

具体的な学生の活動事例を挙げる。

かかし作りの活動では、参加した多くの児童や保護者の前で、学生が作り方のポイントを聞き手の立場に立って分かりやすく説明する姿があった。また、グループ活動の際には学生が一人ずつグループに着いて「目をもっと大きくするといいよ。」「こうやって縛ると、かかしらしくなるよ。」「キラキラをつけて米が食べられないようにしよう。」など一緒に作業をしながら児童や保護者に適切な助言をしていた。出来上がったかかしを見て児童と共に喜び合う達成感共有の姿が見られた。この活動を通して、児童理解力や児童指導力、保護者との関わる力など「教育活動に関しての広範な人と関わる力（人間力）」を習得していることを確認した。

### イ. 仲間と共に企画・運営、実践し、やり遂げる力

今求められる教員としての資質能力の中に、学校組織の一員として協働して仕事を進め、学級経営の担い手として、自分で企画・運営・実践し責任をもってやり遂げる力が求められる。本活動は、単独では何一つできるものではない。共同作業の中で、学生が自分の持ち場に責任を果たすと同時に相手の仕事にも信頼を寄せることで成り立つ取り組みである。そこに相互の団結力や絆を育み、全会員でやり遂げた達成感を味わうことができる。また、収穫祭やかかしコンテストなどの多義にわたる活動を学生が役割を分担しながら、そのねらいを達成するために企画・調整・運営を実践し、責任をもってやり遂げることで将来教壇に立つ者としての教育実践力を身に付けることができる。

### ウ. 教育の専門家としての力量

教員は、「教育のプロ」として子ども理解力、学級経営力、授業力、教材解釈の力などを身に付けることが重要である。本活動は小

学校5年生の社会科（日本の国土の自然，農業）や小学校3～5年生の理科（植物の成長と生命）の教材や指導内容と深い関わりがあり，自らが稲作を体験して得たことをその教材でどのように生かすことができるか，子どもの指導にどう生かすことができるかを整理することが教材解釈の力を身に付けることにつながる。

具体的な事例として，小学校5年生の社会科では，大単元「わたしたちの生活と食料生産～米づくりのさかんな庄内平野～」を取り上げる。米づくりの一連の作業の中で，農家の人々が自然条件を生かしながら，おいしくて安全な米をつくるために工夫や努力していることを，自分の稲作体験と重ね合わせながら具体的に指導することで，子ども達に実感をもってとらえさせることが期待できる。そして，小単元「これからの食料生産」では，現在，TPP問題が話題になっているが，日本の食料自給率が低下し，自国での食料が今まで以上にまかなえなくなる時代にあって，日本の主食としての「米づくり」の重要性を指導するにあっても，稲作体験が生かされると考えられる。

また，稲作活動を体験することは，社会科だけでなく他の教科・領域においても，稲を作る技術や知識の習得という面だけでなく，生物を愛護しようとする態度や生命を尊重しようとする態度，自然を愛する心情，豊かな食を育むことができ，教員としての専門性を高めることにつながると考えている。

### ③活動の実態

学生が，見通しと活動の意味・意義と，その成果とを見据えていくように活用している「稲作研究活動 実績票」から，取り組みの実態を述べる。

「稲作研究会」を通しながら教職への力を蓄積していこうとする学生の立場に立ち，自

身の取り組み実績の姿を，「見える化」して捉えさせる「書き込み票」を使っている。

### 稲作研究会活動 実績票

#### ※記録例

日時	場所	活動内容	収穫	実労時	累積時

#### 4/23 播種準備

**箱の消毒** イチバンと言う薬品を水12ℓに対し30ccを入れて消毒した。残りの薬品水は播種のハウス散布する。念入りである。

**芽だし作業** 金曜日18時から翌土曜日12時まで13時間水に浸し，その後は乾かす

**播種作業** 消毒済みの箱に蒔く蒸発防止シートをかぶせる。水の温度，農薬の濃度などわずかな違いにも大きな差が出ることを指導を受け，改めて驚いた。蒔く間隔の取り方にも生育には影響があるだろうと予測した。

「見える化」としていちばん明確な記録は，実質時間数である。9月半ばまでの取り組み日数だけでも，20日を超えて作業や学習をおこなってきている。

記録を辿ることで，生育の過程を振り返り，成長の節目とそれにまつわる作業の行程も分かり，次年度への計画には欠くことのできない記録作業であることを身を以て学んでいく資料作りにつながっている。

現時点での（9月半ば）活動時間数の

平均は，16.4時間

最小活動時間 2時間 1回参加

最大活動時間 32時間 21回参加

・効果的な活動事例

適時適時に幹部が、「稲作研究報告会」を開催していることである。研究共同体として、不参加の活動についてその内容の共有化を図ることができること。全員の足並みをそろえることも、次活動の密度を高めることとつながる。

さらに、次年度への実践活動を準備していく取り組みでもあり、発展的活動の為には、必然とする活動である。

#### ④まとめ

稲作活動の最終は「収穫祭活動」である。一連の活動を終え、稲作に関して学習したこと、体験してきたことを双方から振り返らなくてはならない。体験の量と知識の深まりは確かにあった。企画・計画・運営の力もそれなりに身に付いた。確とするところは、手間暇掛けて育成したい、労力を通して成長したいという感性に関わる振り返りの結果を11月末に行う活動に期待している。



図5 稲刈りをする学生

## 7. おわりに (今後に向けた課題)

「教師に求められる資質能力」また、「魅力ある教員」として文科省が示す教師像として、使命感、人間理解、教育的愛情、教科指導生徒指導の専門的知識等が上げられている。どれをとっても、教育現場を中心にして

学び取るものであり、現場学習の設定が欠かせないこと自明のことである。「教育とは、人を育てる仕事」の立場からみても、育てる対象者を観て知る、理解を深めることに尽きる。「実践力」の養いを、入学後早期に「教えられてきた身から、教える立場への意識の転換を図ること」から始める。本専攻では「教養演習」なる授業科目を設け、教育人になっていく意識の深化を図りつつ、現場実習や体験的な活動を行う内容でこれを進めている。

「教養演習」は「理論と実践との往還」の学びの実践版として行っている。2年次には学習内容から「教職リサーチ」と称する科目名で現場体験をより、主体的実践的に学習できるようにしている。

学生の意識の転換は知的で行うより、幼稚園・学校現場で実際に子どもたちとふれあう活動で、「センセイ」と呼ばれることや、現場の子どもたちの生き生きした姿に喚起させられて感覚的に転換を図っているのである。現場実習は、入学直後であれ、全ての学生が充足感を湧かせる活動である。充足感という一つの成果を、教職理論として保持できていくように進めなくてはならない。

- ・どんな事実に充足できたのか、その中身を具体的な言葉で置き換えて「実践力」とすること。
- ・偶発・場当たりの観察から得た感動を、児童の表出力、発達心理と結び付けて思考していく場が保障されなくてはならない。
- ・現場指導の状況観察も、鵜呑みの段階から、他との交流によって、客観性のある指導の仕方として取り込んでいかななくてはならない。
- ・幼児児童の呈する一瞬の表出に、見落としはならない眼が高まっていかななくてはならない。

3年次での、短時間であっても、「教壇に

立つ体験」では、指導の技能面はもとより、学習者理解にまで、着眼ができなくてはならない。

上記いずれも意義在る体験に向けては「事前・事後の指導の在り方」に焦点化できる。設定日に照準した期間をもつての取り組みが大きな課題である。(現場体験は夏休み中の取り組みが多く、学習者たちの居場所がばらついている現状)

- ・「こと」に備えて、想起し・計画し・ことへの思いを深めていく、これらの期間が設けられるように進めていくこと。
- ・活動に対する小集団結成を行い、学び合いのスタイルを充足させていくこと。
- ・各自が、心中であたためる期間の重要性が理解できる指導を行うこと
- ・観察・事象把握を確かなものにする交流・討議の十分な時間を確保すること

・現場学習に対しての自己課題の明確化がなされること

教師としての専門性は、「人間の内面を読み、内面に迫る働きかけをしていく力をもつこと」そのために教師・子どもたちと関わる現場体験を積み上げていくのだ、と言い切る人材を養成していくことが専攻の共通の課題である。

#### 〈参考文献〉

- 1) 天城 勲監訳 (1997) : 学習 : 秘められた宝 (Learning : The Treasure Within), ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書, ぎょうせい, 66-76
- 2) 立田慶裕監訳 (2006) キーコンピテンシー国際標準の学力を目指して, 明石書店
- 3) 長崎栄三 (2014) 「PISA が問う能力」教育展望 2014.9 教育出版

